

文化振興ビジョンを推進するための懇話会 第4回会議概要

- 1 日 時：平成25年11月21日（木） 13：40～16：00
- 2 場 所：小田原文学館 白秋童謡館
- 3 出席者
 - (1) 委員（9名）

畠山座長、鬼木副座長、深野委員、牛山委員、小川委員、杉崎委員、露木委員、神馬委員、間瀬委員
 - (2) 行政（8名）

諸星文化部長、瀬戸管理監、中津川文化政策課長、諏訪部文化政策係長、高瀬芸術文化創造係長、坂爪主事
- 4 傍聴者 0名
- 5 会議の概要
 - (1) 第3回懇話会のふりかえり

第3回懇話会のふりかえりとして、事務局から説明。
 - (2) プラットフォームについて

資料2に基づき、事務局から説明

【畠山氏】

- ・資料に基づき説明。

【小川氏】

- ・畠山さんがおっしゃるように、プラットフォームの考え方は、「つなげる」ではなく「つながる」であろう。左側が市役所を中心とした立て系列の従来のイメージであるが、もう少しぐちゃぐちゃにあるものがつながることが必要なであろう。現状のつながり方を見ると、事業の情報がチラシを見るが、それ以外の情報が入ってこないなど、近くにあるのに繋がっていないということはよくあることである。このような繋がりを確認しておいたほうが良いと思う。
- ・自分が横浜でプラットフォームという言葉を使ったきっかけは、シンポジウムで東京都のNPOの方から「地域教育プラットフォーム」の話を聞いたこと。そこは子どもや教育者などいろいろな人集まる場所であり、普段会えないような人とも会えるような場だと聞いた。そのころプラットフォームというと誰も知らないような言葉で、「ジャパン・

プラットフォーム」という災害救援のNGOや赤十字などが活動する場所として存在していたくらいだった。最近プラットフォームよりIT関係の言葉でコモンズという言い方がされている。入会地という感じかと思う。「公共情報コモンズ」の動きを見てみると、東日本大震災以降、災害関係では、明らかに行政だけでは復興がなしえない、行政だけでなく、ケーブルテレビやFM、IT関連など様々なところが連携していくということが当たり前になっている。このような中でプラットフォームという概念は市民権を得つつあると思う。

【杉崎氏】

- ・情報の発信と収集に関しては、HP、ブログ、SNSなど様々な媒体があるが、高齢者に印刷物は必要である。ウェブサイトのものを月に一度か二度、まとめることが必要なのではないか。
- ・深野さんの案で公民館ごとに文化委員などを任命してはどうか。情報をどうやって配布するのかが問題になってくる。地域でそのような人がいれば、市民全体に情報が流れていくのではないか。
- ・発信するための情報を作るために情報の提供者が必要である。文化団体が登録して情報を集められるような仕組みが必要である。
- ・行政の中で、情報や事業など同じようなことをやっている。市民が迷ってしまうのではないか。行政の整理が必要である。
- ・アウトリーチなど外部の人を一度呼んできて終わりになってしまうので、できれば地元の人を生かしたほうがいい。外部の人を呼んでくるにしても、その人を講師にして地元のアウトリーチができる人を集め、地元の人が市民に実施するという流れも考えられる。地元の人を活かせる方法を考えたほうがいい。

【牛山氏】

- ・プラットフォームが実際に運営されているイメージをたたき台として作ってみた。プラットフォームの定義は「小田原の文化を担う人達が、立場を超えて文化振興ビジョンを共有し、将来像を描き形にするためのラウンドテーブル（会議体）である」とした。これからの小田原の文化のあり方を討議していく場というイメージである。目的は資料のとおりであるが、ポイントは、一度にキーマンが集まることである。事務局は行政であってもいい。プラットフォーム自体が何かを実行するのではなく、別組織（NPOなど）が連携して具体的な事業を行う。当初は市からの支援を必要とするがいずれは自立した経営ができることが望ましい。活動とプラットフォームの議論は常にフィードバックしあう関係。機能としては、例えば、情報センター機能や人材コーディネート機能などが考えられる。

【神馬氏】

- ・プラットフォームはどのようなイメージかと考えると、蜘蛛の巣か、または波紋かとも考える。リアルな場所は必要だと思う。市民活動は本当にいろいろな分野が関係してし

まうので、文化振興ビジョンは、文化に絞ったほうがいい。

【深野氏】

- ・情報は収集・発信だけでなく、その間に取捨選択・集約が必要である。
- ・文化芸術に対しては、今も小田原のそれぞれの団体がいろいろな活動を積極的にやっている。あえて言えばプラットフォームの役割はもっと連携をするとか、若い人が入るように活性化のお手伝いする程度の役割なのではないか。
- ・情報プラットフォームに関して言えば、小田原の中に施設がいろいろあるが、それぞれの組織で事業や広報を実施しているので、プラットフォーム側にもっと情報を発信してほしいとお願いするというイメージである。
- ・問題は、なりわいとか伝統文化の分野かと思う。横のつながりがなく、独立している感じがする。生活文化分野をどうネットワーク化していくかが重要な切り口としてあると思う。
- ・一方で芸術文化創造センターはプラットフォームの中核的組織であるべきなのではないか。物理的にもワークショップスペースなどが、たまり場的につかえれば良いのではないか。
- ・文化振興の担い手は若者だけではないかもしれないが、重要なことは、若い力を小田原へどう取り込んでいくのか。そのような発信ができるかどうかである。
そのためには、小田原市域から広げる取り組みが必要で、どこからでもアクセスできることが必要である。行政では市役所なのだから限界がある。プラットフォームのほうが都合がいい。
- ・市民に広く情報を伝えるという意味では自治会を使わない手はない。公民館担当を文化担当にすれば、情報の吸い上げと発信ができるのではないか。

【露木氏】

- ・分野ごとにはそれぞれがんばって活動している。その活動の情報発信だけなら、事務局はボランティアでも大丈夫だと思うが、異業種同士がコラボレーションするにはコーディネーターがいないと難しい。以前、ラリック美術館の学芸員をコーディネーターとして寄木とガラスのラリックを結び付けて、事業を行い、多くの人に来ていただいた。小田原には可能性は多くある。異分野のコーディネートができる人は学芸員や地域学のような分野の人、まちづくりが考えられる人でなければならない。そのような人を育てていくことも必要なのではないか。そしてコラボレーションしたものを発信していくことが必要なのではないか。

【鬼木氏】

- ・皆さんの言っているプラットフォームはそれほど違わないように感じる。少し視点を違えてお話しするが、参考資料に「フェイズ1 関係者の把握」とあるところにじっくり取り組んだほうがよいのではないか。プラットフォームの完成型をいきなり作るのではなく、プラットフォームの前提として関係者を調べてみたらどうかと思う。と

でも具体的な話になってしまって恐縮だが、例えば、小田原市の担い手 100 人インタビューなど、年代もできるだけ、ばらけた形で、人口比で外国籍の人も入れても良いかもしれない。プレ・プラットフォームの原型で、誰か一人でやるのではなく、行政、文化連盟、NPO、無尽蔵など聞き手も幅広い人を設定し、聞かれるほうもいろいろな人として関係者の構造をいったんつくってみたらどうか。

- ・情報発信は集めればいいだけではない。集めただけでは誰も見ない。ストーリーを共有して発信することが重要。未来を考えていく上で精神的な基盤として小田原のストーリーをくみ上げる必要があるのではないか。

【畠山氏】

- ・プラットフォームは、情報、人の交流をするところという話と、会議体という話が出ているが、情報や交流は機能としてということになると思う。事業は誰がやるのかが分かれ道だと思う。

【深野氏】

- ・プラットフォームは場作りであって、主体ではないということになると、それで良いのかと疑問が残る。小田原市として目指すところ、豊かになるって何なのか、何らかの目標を持ってプラットフォームが活動していくべきではないのか。そうしないとなぜプラットフォームに集まって会議をしているのか疑問となるのではないかと。それが鬼木さんの言うストーリーということではないか。

【牛山氏】

- ・10 人いれば 10 人が別の理想を持っていると思う。そのなかで回はこれで行こうというストーリー（文化振興ビジョン）を共有し、決定した内容に責任を持つ人たちがプラットフォームなのではないか。具体的にやる人たちには手を上げてもらってもよい。例えば、助成金で実施して、それに対する評価がされたりするわけだが、それらを見守る、助言をする人たちがプラットフォームである。

【畠山氏】

- ・小田原の方向性は、永遠の課題でまとめられないと思う。小田原を文化によって元気にするというのが最大公約数なのではないか。ひとつにきめないで、いろいろなものがテーマになっていい。このテーマだったら協力できるという人が集まるゆるい連合体でいいのではないかと思う。

【深野氏】

- ・いろいろあるので、ひとつに集中できない。確かにまとめるのは難しいかもしれない。逆に小田原に行けばなんでも体験できるというのも売りになる。そこにはないかテーマがあればいい。

【露木氏】

- ・そういう意味でも小田原のコーディネーターが必要。その人材一からを育てていくことが必要である。根付いてくれる人がほしい。

【畠山氏】

- ・県でも團伊玖磨氏や宮本亜門氏などに芸術監督としてお願いしたが、結局数年、自分の作品をやって離れていってしまう。

【杉崎氏】

- ・小田原はいろいろあるのが魅力だと思う。小田原市の50周年のときに小田原らしいイベントということで考えた。プラットフォームは何かテーマを与えるためのものなのか。テーマがあれば人が集まってくる。文化だけでなく商工会議所とかいろいろな人が関わってもらおうとよい。

【深野氏】

- ・企業では中期計画というのを立てる。大体3年から5年のスパンであり、3年後のために今年に何を仕込んでおくかを考えることが重要だと思う。そういうことを繰り返していくと途切れない。

【畠山氏】

- ・芸術文化創造センター開館はプラットフォームの目標になる。ホールができるから地域に文化推進委員を置くというのもきっかけになるのではないか。

【深野氏】

- ・HPなどは仕組みの話として必ず必要なものなので、作っておいていいと思う。

【杉崎氏】

- ・音楽連盟や文化連盟の展示部門は3年後何をしたいかということを考え出している。しかしそれは現在進行形の団体である。若い力を取り込むということになるとテーマを出すことで若い人はコラボレーションできる。

【深野氏】

- ・芸術文化創造センターのワークショップなども、初めは参加していた若い人は来なくなってしまう。

【露木氏】

- ・外の人、例えばデザイナーとなどを呼んできても一度きりで終わってしまう。先程言ったように小田原に根付いた繋ぐ人が必要である。

【杉崎氏】

- ・続けなければならないと考えると無理になる。一回やって終わりならそれでもいいと思うし、また来年、または3年後にやろうという話になるかもしれない。

【間瀬氏】

- ・プラットフォームは場であり、ゆるやかな会議体として目的を持った人が集まってくるものであると思う。ジョイントするということでは芸術文化創造センターがオープンすれば、表現などのある部分では役割を果たせると思う。しかし、センターがどこまで外に出て行けるかが問題になるのだが、結局、ホールのエリアになってしまい、せいぜいアウトリーチである。いまここで考えているのは、文化振興ビジョンで少し広いプラッ

トフォームなので、すべてをホールでは担えない。しかし、かなりの部分はセンターが情報センター的に機能するのは可能であるし、専門家も置くことになっているのでアドバイスもできる。問題は分野の外のジョイントに目が届くかどうかである。

【畠山氏】

- ・場所はセンターで広い分野でできないものか。

【杉崎氏】

- ・公民館フェスティバルが近いのではないか。

【深野氏】

- ・公民館でやっていることは趣味の領域を超えないであろう。

【間瀬氏】

- ・車掌や乗客をどう作っていくか。芸術文化創造センターでどこまでできるのか不安ではあるが、それが第一歩、スタートとしてはありかもしれない。

【畠山氏】

- ・その前にスタートさせないといけない。開館まであと 3 年である。センターのオープニングのコンセプトを打ち出さなければならないのではないか。「小田原文化の総力戦」とか「小田原文化ここにあり」などどうか。100 人インタビューもいいし、関係団体で円卓会議をやってみてもいい。

【深野氏】

- ・それぞれの団体の問題はたくさんあり、それでいっぱい、小田原の文化をどうしていくかなど考えたことがないのだと思う。小田原文化をどうするのか「強制発想」（創造的発想法の一つで、アイデア 100 個など頭を無理やり働かせる。ブレインストーミング法など）させないと考えないのではないか。乗客は文句しか言わない。動かしている一員になってもらわなければならない。

【杉崎氏】

- ・ホールに対してやりたいことはあるか募集すれば良いのではないか。

【小川氏】

- ・文化に関わる人で、見る人とやる人がいるわけだが、その中間の人々、趣味的な人、ボランティアの人、この層を厚くしていく。ここに対する働きかけがプラットフォームのゆるい中でできるのではないか。

【牛山氏】

- ・よく足を運ぶ人、こころから楽しむ人などがそこに入る。

【間瀬氏】

- ・先程 100 人インタビューが提案されていたが、「文化資源発掘隊」を考えている。担い手でない人たちに集まってもらい地域のミュージカルや芝居を作る。人とつながる過程が大切である。担い手になる仕掛けを作る。そして果実として芝居ができるといいと思っている。

【小川氏】

- ・文化資源発掘隊は市民ライターも方向性としては近いのではないか。市民ライターは、ただのリリースする人ではないと思うし、事前の情報発信ではなく、終わってこうでしたと言う色彩を強くしないと思うが。おしゃれな名前をつければ人は集まるのではないか。

【事務局】

- ・数年前から情報発信ワークショップを行い、参加者の方に小田原城ミュージックストーリーや西相美術展取材してもらった。今年度も牛山さんにご協力いただき、ワークショップを行い、地図作りなどをしていく予定である。

【小川氏】

- ・上から仕組みを決める文化委員のようなものもありだが、下からやってみたい人が集まってきて、両方をバランスよくやっていくことが必要である。

【事務局】

- ・鬼木氏の 100 人インタビューの話は行政の知っている人はかぎられている。人材の要素を広げる取り組みが必要ということであろう。

【牛山氏】

- ・インタビューした人が次の人を紹介したりしていくと、関わった人みんなが小田原に詳しくなる。

【深野氏】

- ・飛び石で人を辿って行くと相互につながって行って、人材ネットワークマップができる。

【牛山氏】

- ・瀬戸内の粟島で以前、フィールドワークをした話を聞いたことがあるが、最初は知り合いが少なく、それほど協力的でなかった島の人たちは、島の人に紹介してもらいながら実施すると、スムーズに話が運び、最後は来るのを待ってられるようになったそうである。人材を描き出すプラットフォームができる。本筋ではないところでつながる。

【間瀬氏】

- ・小田原のもの、資源もふくめた人材作りである。

【深野氏】

- ・結局人が絡まないとおもしろくない。文化と人間発掘をするというイメージである

【間瀬氏】

- ・市民が小田原の歴史や文化を再認識する企画になる。

以上で議題は終了し、次回の日程を確認して会議は終了した。

なお、第5回の会議は1月24日に開催する。